

▲前号に続いて諸般の事情により、本号も頁数が少ない。鈴木敏雄氏（中国文学）には御多忙な中、前号と同じように御協力賜った。

▲翻訳の事情は「訳者附言」に記した通りである。著作権が切れたので訳してみた。共訳者の田口真弥さんが修士論文を出し終えて長崎に帰郷する直前、とりえず私が分担していた訳稿を渡したのだが、その後も、愚図愚図と弄っていた。翻訳をおおやけにするのは、井伏鱒二特集を組んだ『近代文学試論』第20号（1983年6月）掲載のためにA・V・リーマン先生の論文を翻訳して以来のことである。当時大学院生だった綾目広治氏と一緒に大学近くの喫茶店でその校正刷に手を加えたことを思い出した。その時、相当な赤字を入れた記憶がある。同号の奥附に「ひろけい印刷所」とある。そのころ『近代文学試論』は広島刑務所に印刷を依頼していた。大学のあった東千田町から刑務所のある吉島まで出向いて、正門で用件を告げると名札を貰う。門扉に手を触れると注意される。勝手に手を触れてはいけなかったらしい。入ると中庭のような先に建物がある。そこで「先生、と呼ばれる法務技官の方に印刷の進捗状況を聞いたり、校正刷を受け渡ししたりしていた。こんな具合で塀の中の作業担当者には直接会わないが、当時は凸版印刷で一々活字を拾っていたから、相当な手数を掛けたのではなかっただろうか。原文を理解することが肝腎であるのは言うまでもないが、翻訳が面倒なのは、原著者の意を汲みながら日本語としての訳文を組み立てる必要があるからだろう。綾目氏と校正刷を真っ赤にしたのも、そういう理由が大きかったと思う。今回も、自分ならこのように表現するということと、それでは原著とは違ってくるというところとの間で、相応の妥協に至るのはまことに厄介であったし、それが適切であったのか否かという不安が、訳稿を渡した後にも手を入れていた理由である……と言いたいが、誤訳訂正に終始したのが実情。年が明けて、再度、修正した訳文を田口さんに見せると（立場が逆転し、院生時代の緊張感を久しぶりに味わった）、今度は「ちゃんと後ろから訳せるようになってきている」と評された。年末に渡したのは、余程ヒドイと思ったらいい（その時、彼女が口にしたのは「先生は英文を前から訳すんですね」の一言だけであった）。

▲空調設備の更新工事のため、研究室の天井（空調設備は天井に附いている）を空け、さらに工事用の脚立などの通路を確保する必要があった。年末から年初の予定（12月23日～1月13日）だったが、年末にはだいたいの工事は終わって研究室に入れない期間は長くはなかったが、まだ、現状復帰はしていない。

▲物理的な設備更新は比較的容易だが、人間が働く組織はたいへんだ。大学はまた組織改編をする。研究組織が教育組織とが分離していたのを、再度、統合するという。本年3月末まで、私は研究組織としては「社会・言語教育学系」に所属し、教育組織としての「言語系教育コース」の授業を担当していたが、4月以降、「学系」という研究組織は廃止される。そして、研究組織と教育組織を統合して新たに設けられた、「教科内容・方法開発専攻」の「文化表現系教育コース」の「言語系教育分野」に所属するそうである（ここまでが正式組織名称だが「言語系教育分野（国語）」とでも（ ）を附して「英語」との区別がつけないと実際には機能しないだろう）。これまでの「言語系教育コース」は、「コース」から「分野」に格下げされる。「専攻—コース—分野」という深い階層の下に潜っている。ちょっと略記してみると、「兵庫教育大学大学院 教科内容・方法開発専攻 文化表現系教育コース 言語系教育分野（国語）」……、まるで深い深い海の底だ。で、学部の組織は今回の改組とは連動しないので、老いた頭は、深海の底でますます混乱する。

▲前号の「編輯後記」にも、愚痴と嘆きとを重ねたが、事情に好転の兆しはない。馬齢を重ねる一方なのだから悪化はしても好転するはずもない。十代や二十代の頃は〈現在〉に歯がみして堪えながら、〈現在〉を抜けたその先に何かが待っていたような気がしていたが、いまでは〈現在〉と妥協する方法を身に付けてしまったのか、向こうに何もないと観念してしまったのか、〈現在〉を否定的媒介として〈未来〉を求めるということがなくなってしまった。老いによる気力の減退であろうか。こんなことを書いていたら、先輩の訃報に接した。透谷を研究していた山田謙次さんである。知らずに年賀状を出したら、奥様から一か月ほどの入院で昨年5月27日に亡くなられた旨のお知らせを頂戴した。大学院時代に大事にしてくれた方が、また、一人亡くなった。酒席であったか、俗事に超然とした姿勢の背後に交通事故でお姉さんを亡くされた体験が控えていたことをゆっくりと話された口調や、また、磯貝英夫先生の研究室だったと記憶するが、山田さんの故郷佐賀平野で夕暮れ時にカチガラスが大群で飛ぶ様子や、井伏の詩「蛙」で蛙が胃袋を吐き出して洗うところを楽しそうに語られた場面がばらばらに浮かんでくる。私ごとでは、大学院時代に結婚のことを相談するために御自宅まで押しかけ、結婚前の妻とともども御馳走になったことが思い出される。哀しく寂しいと嘆けば、今でも、山田さんが、あのやさしく穏やかな口調で、やんわりと受けとめて下さるような気がする。

（前田貞昭）

兵庫教育大学 近代文学雑誌 第22号

ISSN 0918-8770

〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1

兵庫教育大学大学院 社会・言語教育学系 前田研究室

Tel. & Fax. 0795-44-2083 (ダイヤル)

E-mail: sadm@hyogo-u.ac.jp

印刷 株式会社フジワラ 2011年2月20日発行

（非売品）